文化発信力

国立歴史民俗博物館

千葉県佐倉市城内町

昨日の暮らしが眼前に！

「あの頃は大変だったけど、今は便利になったね」　それっていつから？
「これ、おばあちゃんが使っていたのと同じだわ」　この感覚、懐かしい。

復元された団地のダイニングキッチン。懐かしいものがあふれている。

若者に流行したファッションを中心に。

現代日本は、人口減少が常態化するという不安に直面している。少し前にはバブル景気があって、それ以前の高度経済成長期、前回の東京オリンピックの頃は東京をはじめとする日本全体が国土改造に沸いた。「元気な時代だったね」という声が聞こえてきそうだ。そんな「発展」の時代は、ほんの少し前のことだったのに、はるか昔の出来事だったかのように思われる。

ちょっと以前の人々の暮らしはどんなものだったのだろうか。今や、昭和30年代の生活が懐かしがられ、博物館の展示の一部となっている。

アキバのメイドカフェの服が博物館に飾られる時代でもある。

そんな近過去の様子を教えてくれるのが博物館だ。小さな展示スペースから以下に見るような国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の大スペースまである。

歴博の常設展示は6室あって、第6室（現代）は暮らしに密着した展示で、「ああ、以前はこんな家だった」「この道具、今でも押し入れの中にあるかも」などと同時代感覚で楽しめる。

団地の1室を実物大で再現した展示は、「DKの始まりで、ダイニングとキッチンが一体となっています。そしてテーブルと椅子の洋風の生活スタイルが導入されたことがわかります」と、展示プランを作った、歴博の民俗研究系の関沢まゆみ教授は語ってくれた。

玄関の横には、小さいガス風呂、当時はまだ珍しかった水洗トイレと洗面台などがギッシリ（効率よく！）配置されていた。

「電気釜は、今のようにモダンなデザインではなく丸いお釜の形、テーブルに置かれた魔法瓶、お湯が冷めないから「魔法」瓶ともいわれていましたが、もう今ではなかなかお目にかかれませんね。団地は親子4人の核家族を想定して機能的に設計されていました」（関沢氏）

大きな氷を上段に格納して、下降する冷気で冷やした木製の冷蔵庫が、昭和30年代の東京の生活を描いた映画「Always三丁目の夕日」でも電気冷蔵庫へと入れ替わる場面があった。

1 東芝の電気炊飯器。家電製品のなかでも比較的安価であったため、普及は早かった。　2.3 内風呂、水洗トイレ。いずれも水の安定供給のもとで実現した衛生的な生活の象徴ともいえる。

氷から電気への変化、ここに新しい時代への変化を見たことを思い出した。

歴博では、もう一つ前の時代の、応接間を備えた文化住宅という中流層の夢の住まいも展示。もっと昔の「文明の利器」のほとんどなかった時代も目にすることが出来る。第4室（民俗）では、人間の世界とは別に、今よりもっと身近だった神様や妖怪たちの世界も垣間見られる。

「人びとの生活の歴史と文化を展示している私どもの博物館は、私たちや父母、祖父母、さらに世代をさかのぼって、多くの人びとが作り上げてきた身近な生活文化がどのようなものだったかを、視覚的にも感覚的にも伝えようとしています」と関沢氏。このスペシャルワールドは、小さな楽しい発見に満ちている。

（本誌編集部　一寸木紀夫）

DATA

国立歴史民俗博物館
住所●千葉県佐倉市城内町117
アクセス●総武本線佐倉駅下車、バス約15分
京成佐倉駅下車、徒歩約15分またはバス約5分
休館日●月曜日（祝日の場合翌日）、年末年始
入館料●一般420円（350円）、
高校・大学生250円（200円）、中学生以下無料
URL●http://www.rekihaku.ac.jp
＊現在、第1室<原始・古代>はリニューアル工事のため閉室中。

写真提供・国立歴史民俗博物館